

# 阿弥陀さまをおがむ子どもを育てる

阿彌陀さまを敬うこと

- 一、阿彌陀さまを敬うところを育む。
- 二、合掌礼拝の姿を身につける。

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が初めて同時に改訂・施行されてから1年が経ちました。初めは馴染みがなかった「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」といった新しい考え方にも、だいぶ慣れてきたのではないのでしょうか。

教育要領や保育指針は日本の幼児教育・保育の基本となる事柄が書かれています。もちろん私たちまことの保育を推進する園も、認可施設である以上はこの要領や指針を無視して独自に幼児教育・保育を進めるわけにはいきません。でも「阿弥陀さまをおがむ子どもを育てる」というような目標は、国が定める要領や指針と馴染むでしょうか？

阿弥陀さまをおがむということは、阿弥陀さまを思い浮かべるとともに、目に見えない私たちを支え・育てようとする働きに心を向けるということでもあります。私の園では礼拝の時に両手を合わせて目をつぶり、耳の中にシーンという音が聞こえるようにと促します。もちろん集団での礼拝で文字通り「シーン」となるのは簡単ではありません。でもたまに「シーン」が実現することがあります。こんな日の法話で「なもあみだぶつ」と阿弥陀さまのお名前を称えた後に「ののさまはいつも見守ってくれているね」というお話をすると、閉じていた目を大きく開けて周りを見回す子に混じって、目を閉じたまま目に見えないものを感じようとしている子どもの姿も見られるのです。

場面が変わって外遊びの時、春の暖かな風を感じた園児のこんな一言から、素敵なシーンが生まれたと聞きました。園児1「風があたたかいねー」先生「そうだね、風があたたかいねー」、それを聞いた園児2「風がやさしいねー」先生「そうだね、風がやさしいねー」、葉っぱが風に揺れているところを見た園児3「風が光ってるー」先生「そうだね、風が光ってるー」目に見えない空気が動いて起こる風を感じた園児たちが、さまざまな言葉にして伝えてくれました。「あたたかい」「やさしい」「光ってる」なんと豊かな表現でしょう。

外遊びの場面は10の姿でとらえると「自然との関わり」や「言葉による伝え合い」と言えるでしょう。と同時に「私たちの周りには目に見えない私たちを支え・育てようとする力がある」と感じる力が育っていると言うこともできます。お経には、「阿弥陀さまの国では、鳥のさえずりも木々の葉を揺らす風の音も、ほとけさまの教えを説いている」と書かれています。心を静かにして、「ののさまがいつも見守っている」と心を向ける。それがこれからの厳しい時代を生き抜いてゆく園児たちにとっての生きる力になって欲しいと願います。

## まことの保育の願い

教育原理委員会 加藤泰和